

# 病害虫発生予報 第6号(9月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

## < 予報の概要 >

| 作物名                  | 病害虫名  | 発生量                            | 作物名         | 病害虫名   | 発生量                       |
|----------------------|---|--------------------------------|-------------|--|---------------------------|
| 水稲                   | いもち病<br>紋枯病<br>トビイロウンカ<br>イチモンジセセリ<br>コブノメイガ<br>斑点米カメムシ類          | やや少<br>並<br>少<br>並<br>少<br>やや多 | 野菜・花<br>き全般 | シロイチモジヨトウ<br>ハスモンヨトウ                         | やや多<br>並                  |
|                      |   |                                | カンキツ        | 黒点病<br>かいよう病<br>ミカンハダニ<br>チャノキイロアザミウマ        | 並<br>多<br>やや少<br>やや少      |
| トマト・ミ<br>ニトマト        | 黄化葉巻病   | 多                              | カキ          | 炭疽病<br>うどんこ病<br>円星落葉病<br>角斑落葉病<br>フジコナカイガラムシ | やや多<br>やや少<br>並<br>並<br>並 |
| ダイコン<br>ハクサイ<br>キャベツ | コナガ   | 並                              |             |  |                           |
| 野菜・花<br>き全般          | アブラムシ類およびアブラム<br>シ類媒介のウイルス病<br>ハダニ類<br>ミナミキイロアザミウマ<br>ミカンキイロアザミウマ | 並<br>並<br>やや少<br>並             | 果樹全般        | カメムシ類  | 多                         |

## 気象予報

1 か月予報 (予報期間 8月25日～9月24日 大阪管区气象台)

< 予想される向こう1か月の天候 >

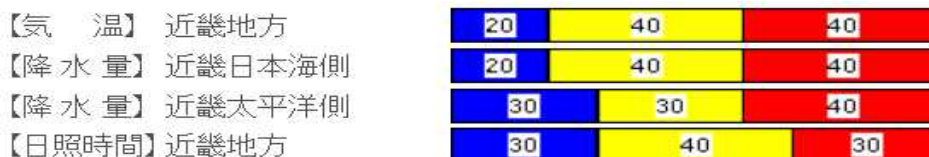
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >



凡例:  低い(少ない)  平年並  高い(多い)

|     |     | 月平均気温 (平年値)<br>(°C) | 月降水量 (平年値)<br>(mm) |
|-----|-----|---------------------|--------------------|
| 9 月 | 和歌山 | 24.7                | 和歌山 183.8          |
|     | 潮 岬 | 24.3                | 潮 岬 304.8          |

# I. 水 稲

## 1. いもち病(穂いもち)

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部および中部の普通期栽培における8月上旬の葉いもちの発病株率は1.3% (平年8.0%) であった。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① いもち病に感受性が高い品種(「キヌヒカリ」等)の作付ほ場では今後の気象推移に注意する。
- ② 常発地では次作から、いもち病に感受性が高い品種の作付けを避ける。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部および中部の普通期栽培における8月上旬の発生ほ場率は38% (平年28%) であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における8月上旬の発病株率は2.8% (平年4.6%) であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多いほ場では、次作の伝染源となる菌核の形成が多くなるので、次作は防除を徹底するとともに密植にならないよう注意する。

## 3. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたり生息密度は、県北部の普通期栽培では0頭(平年0.4頭)、県中部の普通期栽培では0頭(平年0.2頭)、県南部の早期栽培では0頭(平年1.4頭)であった。
- ② 予察灯による8月1~20日の飛来数は、紀の川市0頭(平年2.5頭)、上富田町0頭(平年0.9頭)、那智勝浦町0頭(平年23.2頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場内におけるトビイロウンカの分布はばらつきが大きいので、ほ場全体の発生状況を的確に把握する。
- ② 成・幼虫が5頭以上生息している株を認めたら薬剤防除を実施する。
- ③ トビイロウンカは株元に生息するので、薬液が株元に十分到達するように散布する。

## 4. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたりツトム数は、県北部の普通期栽培では0.1(平年0.1)、県中部の普通期栽培では0(平年0.1)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月下旬~9月上旬に蛹化し9月中旬以降に成虫となるため、防除の必要はない。

## 5. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたり被害葉数は、県北部の普通期栽培では0葉（平均1.5葉）、県中部の普通期栽培では0葉（平均0.9葉）であった。
- ② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による8月1～15日の成虫誘殺数は、0頭（平均4.8頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 9月以降は被害葉率が高くても減収率は低い。また、次世代幼虫の出現がないため、防除の必要はない。

## 6. 斑点米カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① すくい取り調査（捕虫網20回振り）による8月上旬の発生ほ場率および平均成虫数は、県北部の普通期栽培で78%（平均69%）、19.8頭（平均5.5頭）、県中部の普通期栽培で80%（平均77%）、8.8頭（平均8.1頭）であった。
  - ② 予察灯による8月1～20日の誘殺数は、紀の川市194頭（平均189.2頭）であった。
  - ③ 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 晩生品種では、乳熟期～糊熟期に薬剤を散布する。

## II. 野菜・花き

### <トマト、ミニトマト>

#### 1. 黄化葉巻病

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
  - ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける8月中旬の発生ほ場率は100%（平均54%）、発病株率は60.6%（平均21.2%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 生育初期に感染すると被害が大きくなるため、施設栽培では施設開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、媒介虫であるタバココナジラミの侵入を防止する。さらに、外張り資材に紫外線除去フィルムを使用すると侵入防止効果が高まる。
  - ② 定期的な薬剤散布および定植期の粒剤処理により、感染適期である育苗期から本ほ初期（8～10月）のタバココナジラミ防除を徹底する。
  - ③ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
  - ④ 平成30年度病害虫発生予察注意報第5号（8月30日発表）を参照する。

### <ダイコン、ハクサイ、キャベツ>

#### 1. コナガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平均0頭）、和歌山市0頭（過去7年の平均0.1頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

### <野菜・花き全般>

#### 1. アブラムシ類およびアブラムシ類媒介のウイルス病（露地野菜全般）

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月下旬のワタアブラムシの発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率19%、生息葉率2.7%）、モモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率9%、生息葉率0.6%）であった。
- ② アブラムシ類の黄色水盤（紀の川市）への8月1～20日の飛来数は、174頭（平成46.7頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類媒介のウイルス病には、アブラムシ類の防除対策としてシルバーマルチを行い、薬剤防除と併用する。
- ② ハクサイ等の育苗では、防虫ネットで被覆して有翅虫の飛来を防ぐ。

## 2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月下旬のカンザワハダニの発生ほ場率は17%（平成23%）、生息葉率は0.7%（平成5.5%）、ナミハダニの発生ほ場率は17%（平成8%）、生息葉率は0.7%（平成2.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

## 3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月下旬の発生ほ場率は17%（平成59%）、生息葉率は0.7%（平成16.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また、施設の開口部に防虫ネットを展張し、成虫の飛び込みを防ぐ。
- ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

## 4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月下旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率1%、生息葉率0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

## 5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市87頭（平成12.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。
- ② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗または防虫ネットで被覆すると被害が軽減される。
- ③ 防除については平成29年度病害虫防除技術情報第2号（8月9日発表）も参照する。

## 6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける8月下旬の発生ほ場率は0%（平成7年）であった。

② フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市38頭（平成7年61.5頭）、和歌山市116頭（過去7年の平均91.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① シロイチモジヨトウに準ずる。

## Ⅲ. 果 樹

### <カンキツ>

#### 1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生園率は42%（平成7年40%）、発病度は2.5（平成7年1.8）であった。

② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 8月中下旬に防除できなかった園では、9月上旬に早急に防除を行う。

② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

#### 2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量（果実および夏秋梢） 多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生園率（春葉）は45%（平成7年26%）、発病葉率（春葉）は2.3%（平成7年1.0%）であった。

② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 罹病性品種の場合、付傷すると果実発病のおそれがある。台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。

② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。

#### 3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生園率は8%（平成7年31%）、発生葉率は2.6%（平成7年6.9%）、100葉あたりの雌成虫数は7.8頭（平成7年18.8頭）であった。

② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統の薬剤は年2回以上使用しない。

② ミカンサビダニの発生にも注意し、両種に適用のある有効薬剤を選択する。

#### 4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬

の被害園率は8%（平年42%）、100果あたりの寄生虫数は0頭（平年0.4頭）であった。

② 予察ほ場（無防除、由良町）における黄色粘着トラップによる8月中旬の誘殺数は181頭（平年183頭）であった。

③ 9月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 8月中旬以降に有効な殺虫剤を散布していない園および夏秋梢の多い園では、9月の発生に注意する。

## <カ キ>

### 1. 炭疽病

（1）予報内容 発生量 やや多

（2）予報の根拠

① 県北部における8月中旬の発生園率は、「富有」18%（平年2%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平年0%）であった。

② 県北部における8月中旬の発病果率は、「富有」0.4%（平年0.1%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平年0%）であった。

③ 9月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や発病果実がみられる場合は剪除する。

② 降雨が続く場合は追加防除を行う。また、台風が接近する場合は事前に薬剤を散布し、できなかつた場合は台風通過後速やかに散布する。

③ 密植園や風通しの悪い場所は発病しやすいので、園内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

### 2. うどんこ病

（1）予報内容 発生量 やや少

（2）予報の根拠

① 県北部における8月中旬の発生園率は、「富有」59%（平年78%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平年32%）であった。

② 県北部における8月中旬の発病葉率は、「富有」2.0%（平年14.3%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平年1.9%）であった。

③ 9月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。

② 秋季になり気温が低下すると再び病勢が増すので、二次伝染防止に努める。

### 3. 円星落葉病

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 県北部における8月中旬の発生園率は、「富有」0%（平年2%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平年3%）であった。

② 県北部における8月中旬の発病葉率は、「富有」0%（平年0.0%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平年0.1%）であった。

③ 9月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 本病は樹勢の低下により発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

### 4. 角斑落葉病

（1）予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生園率は、「富有」0%（平成0%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平成1%）であった。
- ② 県北部における8月中旬の発病葉率は、「富有」0%（平成0%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平成0.0%）であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は樹勢の低下により発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。
- ② 本病は二次伝染を繰り返すので、10月上旬まで防除を励行する。

## 5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生園率は、「富有」65%（平成77%）、  
「刀根早生」・「平核無」24%（平成33%）であった。
- ② 県北部における8月中旬の寄生果率は、「富有」6.7%（平成11.4%）、  
「刀根早生」・「平核無」の寄生果率は0.9%（平成1.6%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本虫は主に果実とへたの間隙部に寄生しているので、薬液がこの部分にかかるように丁寧に散布する。

## < 果樹全般 >

### 1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬のカキの被害果率は、「富有」4.4%（平成4.8%）、  
「刀根早生」・「平核無」0%（平成0.5%）であった。
- ② 紀の川市粉河の予察灯における8月5半旬（8月21～25日）のチャバネアオカメムシの誘殺数は341頭（平成108頭）、ツヤアオカメムシが227頭（同27頭）であった。
- ③ 有田川町奥の予察灯における8月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は435頭（過去4年平均159頭）、ツヤアオカメムシが136頭（同76頭）であった。
- ④ みなべ町東本庄の予察灯における8月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は532頭（過去8年平均435頭）、ツヤアオカメムシが131頭（同207頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。
- ② カキでは「富有」、カンキツでは収穫時期の早い極早生品種で被害が大きいため発生に注意する。
- ③ 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ④ 台風通過後や強風後には、一時的に飛来が多くなることがあるので注意する。
- ⑤ 平成30年度病虫害発生予察注意報第6号（8月31日発表）を参照する。
- ⑥ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

**○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所>

[https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/  
boujyosyo-yosatsujyohou.html](https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html)

**○和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780